



No. 24 81. 3. 15

発行 加古川市教育委員会
教育指導部文化課
編集 加古川市文化財審議委員会
加古川市加古川町寺家町12-4
TEL 233845

発掘調査報告①

さつま

札馬古窯跡群 55年度発掘調査

調査概要

志方町札馬を中心として、中東部播磨丘陵には、多数の須恵器生産地が、分布していることで全国的に知られている。しかし、その規模や内容についての検討は、城山ゴルフ場内の窯跡の調査（昭和51年度、西ノ池古窯址群調査）が行なわれた以外、ほとんど行なわれずに今日にいたっている。一方、開発事業の進展とともに未調査のまま消滅する窯も近年増加しており、早急な対応が望まれていた。所有者の協力を得て、今回調査を実施したのは、碎石場内の山林に所在する窯跡で、各々範囲確認と性格の推定資料の検出に主眼をおいた。

各窯跡の調査

A地区

5号窯

〈位置と状況〉 5号窯は標高7.2m～7.5mをはかる丘陵中腹斜面につくられた登窯（のぼりがま）である。全長は、斜距離約7.70m、水平距離約7mを

はかる。灰原は焚口からほぼ斜面にそって左右約5mの巾で広がっており、深さは10cm前後と、きわめて薄い。窯体からみて左側は、土砂採集により灰原は失われて、崖面をなしている。

表土から約20～30cm前後で窯体が検出された。遺存状況は比較的良好で、奥壁、天井部は欠失していたが、焚口及び焼成部は残っていた。

〈遺物〉 窯体内に完成品の椀（わん）を中心に瓶子（へいし）・壺・片口鉢・甕（かめ）・鉄鉢など約50点の遺存があった。特に椀についてみると、底部に見られる糸切り未調整とヘラ切りの二種類のロクロ切り離し法の痕跡がみられる。これは当該時代の須恵器編年に重要な資料を与えるものと考えられる。

時代は、10世紀中頃のものと考えられる。

6号窯

分布調査で6号窯とされていたところに巾1m、長さ12mの第4トレンチ、巾1m、長さ29mの第2トレンチを設定し、窯跡の検出につとめたが、灰を含む堆積層10～20cmとその層から6点の須恵器片を



札馬5号窯



調査地 位置図

検出したにすぎなかった。窯体は、トレンチの西南方に所在すると考えられるが、その規模は不明。

B地区

2号窯

2号窯の巾は110cm、全長(斜距離)約7m、傾斜角約35度をはかる登窯である、灰原は、焚口の主軸方向から北に偏っており、その広がりは左右10mをはかる。灰層の厚さは、最大50cm、遺物の包含は非常に多く、蓋杯・甕・壺・皿・盤などがある。時期は8世紀末~9世紀前半頃と考えられる。

3号窯

灰原の広がりは4m、灰層の厚さ約40cmで、焼土炭灰を含む。遺物は、須恵器1点を検出したにすぎな

い。第1トレンチ南端で、須恵器2点を採集している。ただし、灰層との痕跡は全くみられなかった。

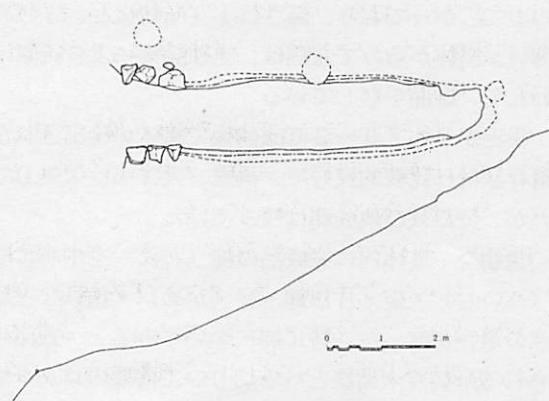
今回の調査は、A・B地区と仮称した2つの谷で行なった。両者の関係は、主谷であるところのB地区3号窯は、8世紀末~9世紀で、支谷のA地区の5号窯は、10世紀中頃の窯である。

前者のB地区の窯体の構造は、他の陶邑古窯跡などにみられる通例の窯である。

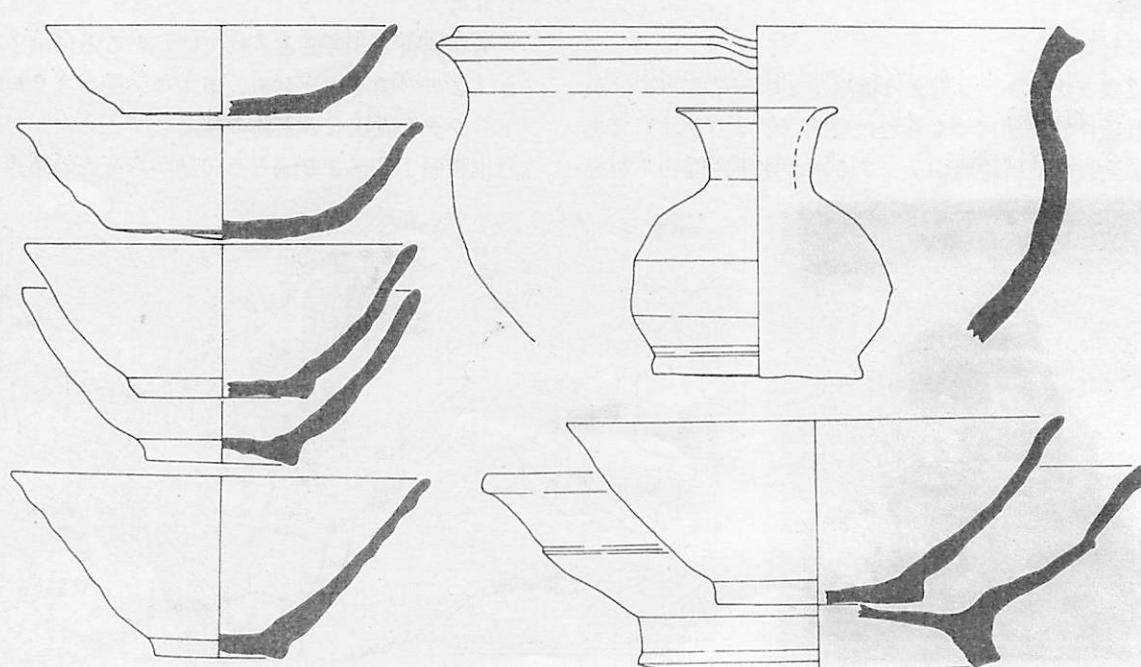
一方、5号窯は、現在の陶芸で用いられているよこくべの手法が想定されるもので、おそらくはこの手法では最も古い段階と考えられる。さらに焚口に石を用いている点は類例が少なく(瓦窯には比較的よくみられる)窯体構造を研究するうえで、貴重な資料といえる。また、5号窯の窯体内床面に遺存した椀(杯)の2種類の製作手法が共存することは須恵器編年の上からも、きわめて注目されるものと言えよう。

調査担当 大谷女子大学講師 中村 浩
調査補助 上月昭信
夏原信義
大谷女子大学考古学研究会

調査期間 昭和55年12月15日~
昭和56年1月11日



5号窯 遺物実測図



基壇発掘

発掘調査報告②

昭和55年度 西条廃寺跡発掘調査

加古川市西条字北山に所在する古代寺院跡について最初に注目したのは、鎌谷木三次氏である。氏は、『播磨上代寺院址の研究』において、「西条廃寺」として、一般に紹介された。瓦の散布状況や、周囲の地形さらに中央部の塔跡と考えられる土壇等より、氏は当廃寺の伽藍配置を四天王寺式と想定された。また古瓦や風鐸などの瓦物考察も記述され、現研究者達への貴重な資料を提示された功績は大なるものがある。

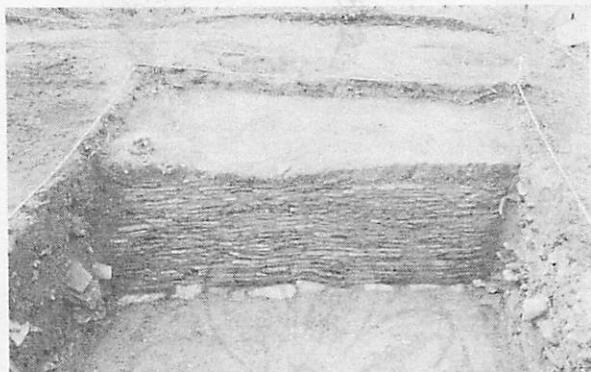
本年度より、文化課は、前記の研究結果に基づき、3ヶ年計画で寺域の確定ならびに伽藍配置を究明し、史跡公園への基礎資料を作製する為に発掘調査を実施した。

塔跡は周囲より約1m程高く、県史跡指定範囲内のほぼ中央に位置している。周囲に幅3mのトレンチを設置したところ、北・東・南の各トレンチ内に瓦積基壇が検出された。特に東トレンチに検出した基壇は非常に残存状況が良く、地覆石や雨落溝も検出され、旧地表より約1mの高さをのこしていた。また北及び南トレンチ内においても瓦積基壇は確認されたが、一部欠損しているところも認められた。調査の結果、この基壇一辺長は約10・5mを測り、旧尺によれば35尺の規模を有するものと考えられる。また塔基壇上面の平面調査において、心礎の根石や一部四天柱・側柱の根石も検出された。塔基壇西部は後世において土取

りを受け、瓦積基壇は検出されず、地覆石跡が認められたにすぎない。

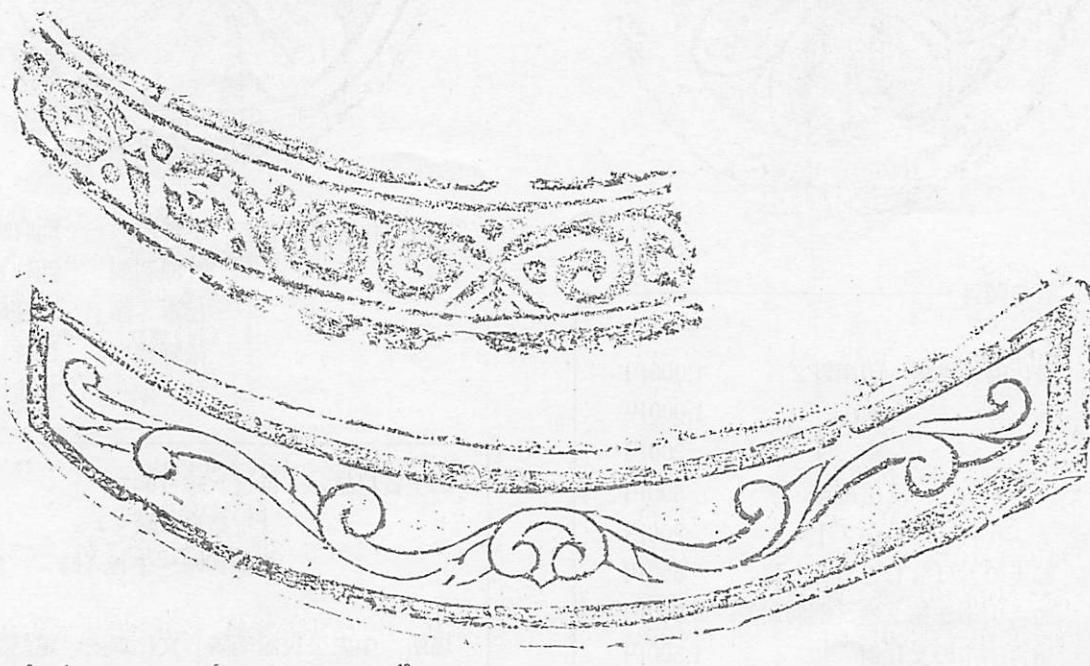
塔跡の東において、周囲より若干高い所が認められたので、塔跡と同じく東西にトレンチを設定したところ、東側において、「版築」遺構が検出された。よって当所にも建築物が想定され、現状においては、東西約10・5m南北約17mの土壇が考えられる。

人塚古墳の周濠東にトレンチを設定したところ、周囲より固くしまった幅約4・5mの帯状の土層を検出し、同じく南30mの所においても同様の土が検出された。この遺構は、塔心礎より西約36mに位置し、築地もしくは土壘と考えられ、当廃寺の西を限る遺構と考えられる。調査地域の東及び南地域においては明確な遺構は現在のところ検出されず、中門・南門・東



▲基壇東側

▼出土軒平瓦



築地は今後の調査に期待される。

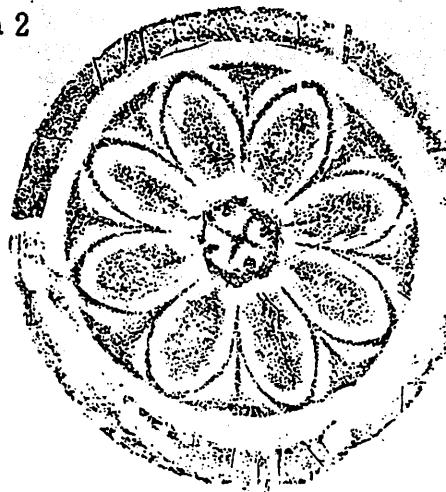
出土遺物には、瓦・水煙・鉄釘等がある。軒丸瓦No.1は今回の調査で検出された瓦の内最古のもので、奈良県平隆寺や中宮寺の瓦に非常に良く似ている。No.2は塔跡を中心に多く検出され、主に塔に葺かれた瓦であろう。No.4は法隆寺西院瓦の退化したものと考えられ、当廃寺の伽藍配置と共に興味を引くものである。軒平瓦には、現在2種類が検出されているが個体数も非常に少なく、塔には軒平瓦は使用されなかった可能性を考えられる。瓦より当廃寺の創建ならびに終末を

出土軒丸瓦

No.1



No.2



販布図書

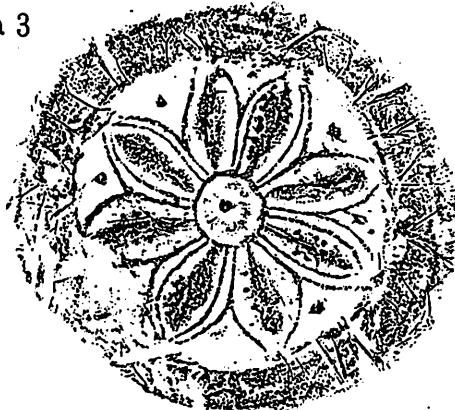
文化財報告書 印南野2	1,000円
" 中山	1,000円
" 岸	200円
" 広尾東	500円
" 山ノ上	200円
郷土のおはなしとうた3集	600円
加古川市誌第2巻(別府町)	5,000円
加古川市の文化財	1,500円

考えると飛鳥時代中頃より平安時代初期が考えられる。

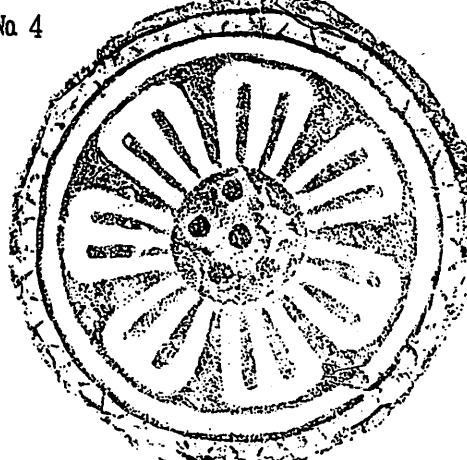
本年度の調査の主な成果は、(1) 伽藍配置が法隆寺式の可能性が強まつた。(2) 寺域の制限が確定した。(3) 当時の存続年代がほぼ判明した。以上であり、また今後の発掘調査課題として積残された問題も多くある。

兵庫県教育委員会社会教育文化財課
西口和彦

No.3



No.4



民俗文化財寄贈者名	宇野政二	別府町新野辺
	菅原利朗	西神吉町長慶
	松本 浄	平荘町山角
	磯野禮次	西神吉町大國
	林 栄三	加古川町大野

郷土資料館	毎週水曜日開館 (祝祭日は除く) 午前10時~午後4時 無料
-------	--------------------------------------

場所 中央公民館南隣 文化課内 電話②3845